



一般社団法人 北海道開発技術センター設立40周年 記念事業

## 冬の暮らしアイデア実現化プロジェクト 進捗報告 Vol.01

昨年度、当社設立40周年事業として令和6年2月29日に「冬の暮らしアイデアコンテスト」を開催しました。今年度は、最優秀賞アイデア「愉雪の巡い(うつろい)」の実現化に向け、共同研究を展開しています。ここでは、プロジェクトの現在の進捗をお知らせします!

思い起こせば、異様な暑さを見せる真夏の7月29日、共同研究メンバーの顔合わせ会でした。札幌市立大学からは最優秀賞を受賞した学生さんたち(原さとみさん、中川斐世利さん、小野日大さん)と指導教員の齊藤雅也教授(建築環境学)、彼らのアイデアを実現すべく造園学からは大島卓同大学准教授、雪氷学からは松澤勝グループ長(寒地土木研究所寒地道路研究グループ)、松岡直基氏・小林利章氏(株式会社北海道気象技術センター<HowTecc>)といった各部門のスペシャリストが集まりました。改めて最優秀賞のアイデアをご披露いただくとともに、造園学からは雪を基調とした景観-スノースケープ(雪景)-のお話、雪氷学が



雪氷研究の総本山で研究できる喜び!  
(左から、金子さん<HowTecc>、松岡さん<HowTecc>、山口さん、倉内理事長、小野さん、原さん、中川さん)

ぼくたちが報告します!

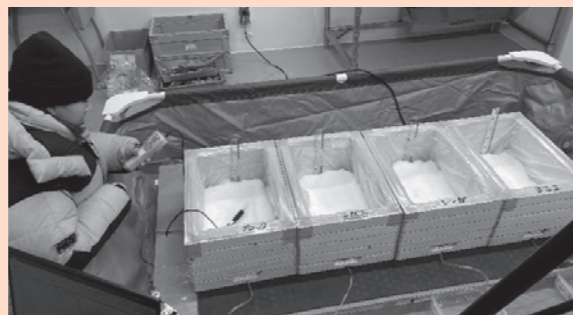


dec 小西 信義 主任研究員 dec 米谷 光司 研究員

らは融雪現象のメカニズムや現象把握の手法等が話題提供され、今後の魅力的な融雪空間づくりについて楽しく議論しました。

続いて、去る11月中旬、融雪現象の解明のため新潟県長岡市にある防災科学技術研究所雪氷防災研究センターにて、融雪実験を行いました。札幌市・札幌市立大学・防災科学技術研究所との包括連携協定(令和6年1月25日締結)も後押しし、最高の環境で実験ができました(中村一樹センター長、山口悟 首席研究員、平島寛行 主任研究員に大感謝!)。融雪実験では地中の熱や太陽光の影響を低温室環境下で極力再現し、天然石やレンガ、真砂土といった公園の地面に敷設する素材の違いにより融雪速度に違いがあるかを観測しました。実験は大成功!素材の違いによって雪の融け具合が違うことが観測できました。

今後は、これらの観測結果を応用し、今冬お試して魅力的な融雪空間を作りたい!と思います!乞うご期待!



融雪現象を解明するぞ!

## 第24回「野生生物と交通」研究発表会のお知らせ

第24回「野生生物と交通」研究発表会を札幌市で開催いたします。野生生物と交通に関心を持つ多くの皆さまのお申込み、ご参加をお待ちしております。詳しくは、ウェブサイト(<https://www.wildlife-traffic.jp/>)をご覧ください。

【開催日】2025年2月28日(金) 10:00(予定)~  
【会場】札幌コンベンションセンター 中ホール  
(札幌市白石区東札幌6条1丁目1-1)

Zoomによる  
同時配信(聴講のみ)

お申込みは  
こちら



申込項目	参加費等	お申込み締切
会場聴講	無料	2025年2月14日(金)
懇親会(定員:50名)	5,000円(予定)	2025年2月14日(金)
講演論文集[事前予約]	3,000円(当日販売)	2025年2月14日(金)

オンライン聴講をご希望の方は、事前登録が必要です(無料)。登録方法につきましては、プログラム確定後にウェブページに掲載いたします。

※ウェブページの申込みフォームもご利用ください

お問合せ

(一社)北海道開発技術センター「野生生物と交通」研究発表会係(担当:鹿野・向井)  
TEL:011-738-3364 FAX:011-738-1890 E-mail:wildlife@decnet.or.jp  
ウェブサイト:<https://www.wildlife-traffic.jp/>

## 編集後記

本年もどうぞよろしくお願いいたします。幸さんの音楽の才能にただただ驚くばかり!天は二物以上も授けるんですね(羨)。さて音楽の話つながりで、昨年フォークバンドの「BENBE」さんを知ったのですが、演奏が始まった瞬間、会場全体が一体となり、楽しい雰囲気になって一瞬で虜になりました。ボーカルの古川さんは留萌市出身で、札幌を拠点に活動するかわらBarを経営されており、そのお店に行ってみたりしています(ストーリーでない)。名曲「NANCY WHISKEY」は、聴くとたちまちウイスキーが飲みたくなります!(私は飲めないけど。残念)(MK)



YouTubeで聴けます!  
(ウイスキー片手にどうぞ!) とても気さくな古川さん



dec monthly vol.472

2025年1月1日発行

発行人 倉内 公嘉  
編集人

発行所

一般社団法人 北海道開発技術センター 〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17  
TEL(011)738-3363 FAX(011)738-1889 URL <http://www.decnet.or.jp/> E-mail [dec\\_inf001@decnet.or.jp](mailto:dec_inf001@decnet.or.jp)



Hokkaido Development Engineering Center

# dec monthly

2025.1.1 vol.472 デックマンスリー



● Monthly Topic (マンスリートピック)

〈新春特別企画〉

シーニックバイウェイ北海道の20年とこれから

● dec Report (デックリポート)

〈寄稿〉シーニックバイウェイ北海道「街道唱歌」のはじまり

新年のごあいさつ>>> 一般社団法人 北海道開発技術センター 会長 高野 伸栄

新年明けまして、おめでとうございます。2024年、皆さんいかがお過ごしだったでしょうか?

一昨年の猛暑に比べると、昨年の夏は比較的過ごしやすかったように感じます。一方、9月、10月は暖かく、恥ずかしながら「今年は11月いっぱいゴルフできるぞ」と息巻いておりました。

気象データによると、札幌の猛暑日は一昨年3日、昨年0日で強烈に暑かった日が少なかったことが分かります。北海道の月別の平均気温を30年間の平年値と比較すると、3月は-0.2℃となっていますが、1月から10月の間、3月を除き全てプラスで、4月+3.0℃、7月+2.7℃とのき並み高く、平均で+1.6℃となっています。100年単位で考えると、+1.75℃/100年のペースで上昇しているようですが、近年はこの傾向から大きく上振れしています。

日々の生活の中で、いつもより暖かいことは、特に北海道では心地よく過ごしやすいと感じます。しかし、長期的に考えると、この暖かさは、これまでの平常と比べると、異常へと向かう1ステップと考えなくてははいけないと思われます。

長期に亘って考えなければならない事柄に対して、今この時をどのように対処すべきかは、自然災害、インフラメンテナンス等我々が取り組んでいる問題に対して、いつもつきまとう課題です。数百年に一度の災害への対処で、今の生活を全てないがしろにすることが正しいとは思えません。長い長い年月と今をどのようにつないでいくかが問われています。

decは40周年という大きな節目を過ぎ、シーニックバイウェイ北海道は20周年を迎えます。また、本年9月、札幌で開催されるJCOMM(日本モビリティ・マネジメント会議)もまた20周年を迎えようとしています。このような節目で、これまでを振り返り、これからを考えることは、この意味から、大きな意義があるように思います。

我がコンサドーレは、本年から別のステージで戦うことが決まりました。このことは、今、とても大きな悲しみです。しかし、数年後、チーム史において、「この降格が最強のチームをつくる上で大きな転換点であった」といえるのではないかと、密かに夢みているところです。

明けましておめでとうございませす。  
本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。





# シーニックバイウェイ北海道の 20年とこれから

新春特別企画 座談会

「シーニックバイウェイ北海道」が制度としてスタートしたのは2005年。「Scenic(風景のよい)」、「Byway(脇道・寄り道)」という言葉から成る名称は、今や北海道旅のキーワードの一つとして親しまれるようになっていきました。しかし、ここに至る道のりは決して平坦ではなく、官民学さまざまな領域、立場を越えた多くの人の情熱と連携によって歩みが進められてきました。それはまさに「プロジェクトX」ならぬ「プロジェクトS(シーニック)」ストーリー。

制度誕生20周年の年明けに当たり、これまでの歩みや成果、そして今後の進展に向けた課題や願いを、シーニックバイウェイ北海道にゆかりの深い御三方をゲストに迎え、decの倉内公嘉理事長とともに語り合っていました。

【インタビュー】原文宏【(一社)北海道開発技術センター 理事、地域政策研究所 所長】 【文】木村 篤子

## それは「北の道」から始まった

まずは「シーニックバイウェイ北海道」(以下、「シーニック」と略)の誕生秘話から始めたいのですが、これはやはり北海道開発局で立役者として奮闘された和泉さんからお願いします。

◆和泉 私が「シーニックバイウェイ」について本格的に勉強したのは省庁再編で国土交通省が発足した2001年、国土交通省北海道局地政課に赴任してからのことでした。北海道局として初の概算要求に向けた重点施策を出すということで各課、検討して出したのですが、他局との調整で当初の施策はことごとくはじかれてしまった。それで上司で事業計画調

整官だった高松泰さんが米国の取り組みとして情報を得ていたシーニックバイウェイで出そうと言われ、それを受けて私は改めて情報収集するなどして施策にまとめたのです。

施策の内容はOKだったけれど、当時の局長曰く「シーニックバイウェイの名称ではわかりにくいから北海道らしい施策名を考えろ」と。それで東大出身の若い職員に100種類ぐらい考えてもらったけど全てボツになり、結局、私が考えた「北の旅景色創出プログラム」になった。「北島三郎の歌みたいだ」という声もあったけれど(笑)、それで北海道局重点施策として通り、シーニックは公式にスタートしたんです。

実は、シーニック展開の大事な布石

とも言うべき出来事がすでに90年代半ばにありました。それが第6期北海道総合開発計画(1998年閣議決定)策定のための交通ワーキンググループの委員会でお世話になった石田東生先生(当時・筑波大学教授)との出会いです。

◆石田 あのワーキングは「北海道が外からどう見えるか提起してほしい」という意図があったようで、いろいろ注文をつけさせてもらったけれど、「日本のためになることを北海道で始めてほしい。それは景観であり、観光だ」と話したことを覚えています。

当時の僕の主領域は交通政策や都市計画で、観光は全く専門外。しかも研究手法は事業予測など数量的



いずみ あきひろ  
和泉 晶裕 氏

(一社)シーニックバイウェイ支援センター 代表理事

札幌市生まれ。北海道大学大学院工学研究科修了後、1986年北海道開発局入庁。2012年国土交通省北海道開発局建設部道路計画課長、17年北海道開発局長、18年北海道局長。19年に退任後、北海道建設業信用保証(株)理事などを務め23年同社代表取締役社長。「自転車もテレビゲームも好きだが、最近の趣味は人づきあい」。



いしだ はろお  
石田 東生 氏

シーニックバイウェイ北海道アドバイザー会議 委員長  
筑波大学大学院特命教授・名誉教授

大阪府生まれ。東京大学工学部土木工学科卒業、1982年工学博士。専門は交通政策、国土政策、都市計画。82年より筑波大学社会学系で教員を務め、96年教授、2006年学長補佐などを経て17年定年退職。NPO法人日本風景街道コミュニティ代表理事。国土交通省社会資本整備審議会、国土審議会の委員など公職多数。「ゴルフの暇なく、変わらぬ趣味は読書」。



やまがし なつこ  
山岸 奈津子 氏

シーニックバイウェイ北海道アドバイザー会議 委員  
(一社)SHIRAOI PROJECTS 代表理事

札幌市生まれ。札幌学院大学卒業後、2003年(株)星野リゾート・トナム入社。企画広報マネージャーとして活躍後、13年企画PRプランナーとして独立。札幌国際芸術祭、NoMapsなどに携わる。22年白老町に移住し地域おこし協力隊の文化芸術担当として活動し、23年(一社)SHIRAOI PROJECTSを設立。「仕事につながりそうな「面白いもの探し」が趣味」。



くらうち きみよし  
倉内 公嘉 氏

(一社)北海道開発技術センター 理事長

芦別市生まれ。室蘭工業大学大学院修了後、1986年北海道開発局入庁。2016年国土交通省北海道開発局小樽開発建設部長、18年北海道開発局建設部長、19年国土交通省大臣官房審議官(北海道担当)、20年北海道開発局長。21年退任後、dec顧問を経て22年より現職。「最近の趣味なら手軽に楽しめるゴルフの練習」。

な分析が主体だった。それが和泉さんやdecの原文宏さんと出会い、2003年に始まる「北海道におけるシーニックバイウェイ制度導入モデル検討委員会」で委員長をさせていただくなどシーニックに本格的に取り組むようになって、研究も人生も大きく変わりましたね。

◆和泉 業務委託のパートナーとしてのdecさんの存在も大きい。最初は熊谷勝弘理事長の時代(2002~07年)でしたが、現場では原さんを先頭に持続的、全面的にバックアップしていただいていた。シーニックの20年とは、人に恵まれた20年だったと思います。

◆石田 北海道のシーニックに触発され、その後、国土交通省道路局が「日本風景街道」(2007年登録開始)をスタートしましたね。それによってシーニックの取り組みは全国

に広がった。これも大きなことだと思います。

## 人の輪をつないでいく

では、20年の歴史のなかでシーニックがもたらしてきたものは何か、さまざま角度で振り返りたいと思います。現在、アドバイザー会議委員の山岸さんは民間の観光業に携わるなかでシーニックと出会われたのでしたね。

◆山岸 私が星野リゾート・トナムの企画広報担当のときに、トナムの冬のプログラム「アイスビレッジ」について大雪・富良野ルートのアートプロジェクト「ウィンターサーカス」への連携をお誘いいただいたのが最初です。2008、9年ごろのことで、私にとっては「雲海テラス」について北海道大学と観測などの協力関係

を模索していた時期。以来、decさんとも緩く、長くおつきあいができてきました。

現在は白老町に暮らし、地域おこし協力隊として地域の魅力づくりに取り組んでいますが、白老は今のところ、シーニックのルートから外れた空白地帯(笑)。アドバイザー会議委員として各地の状況を見聞するなかで、もし白老で取り組むならどんなふうにやろうか、などと思っています。

道路という誰もがアクセスするものを媒介にして地域がつながろう、というのは理にかなっていると思うし、シーニックに参加することで、それをどう加速させるかは各ルートの手腕次第。その活用の巧みさは地域の熱量の違いなどで差が出るのかなと思いますが、うまく活用している地域の手法が全体で共有され

decmonthly 2025.1.1 vol.472

decmonthly 2025.1.1 vol.472





ていけばいいですね。

◆倉内 16年程前の小樽開発建設部次長のころに、地域のシーニックの人達と仲良くさせてもらうようになりました。以来、北海道開発局職員の立場で取り組みを見守ってきましたが、局長退任後はdecの一員として各地の関係の方々より親しく交流する機会に恵まれています。

今、あらためて思うのは、地域の人々のそれぞれの取り組みはシーニックがなければ「点」だったけれど、それが「線」でつながり、さらに「ネットワーク」になっていった。これがシーニック20年の大きな効果だと思います。地域づくりに携わる人たちにとって自分たちだけでやっているときとシーニックに参加してからでは受発信の情報量が全く違うし、自らの立ち位置の確認や励みにつながっていると思いますね。

◆石田 decさんは設立40周年だけれど、その半分以上の期間、シーニックに携わり支えてこられた。これもすごいことです。北海道開発局においても一つの事業が20年余続いているというのは異例ですね。

◆倉内 当初は、地域の人たちと対面的に接することの多いシーニックの業務にとまどいを感じた職員は多かったと思いますね。年月とともに鍛えられ、地域の人たちと腹を割って話ができるコミュニケーション能力が養われてきたと思います。今では、他の役所を飛び越して開発建設部のシーニック担当者に地域づくりの相談事が持ち込まれることも珍しくな

いようです。

◆山岸 地域の人々の多くは行政とのつきあい方がよくわからないので、とりあえず、近くにおいて親身になってくれそうな人に話してみる、というのはありますね。シーニックによって開発局にそのような地域の窓口機能が生まれた、というのはすごく面白いと思う。

◆石田 それこそシーニックの大きな成果の一つでしょう。昨今、「道の駅」や地域防災の取り組みなどでも国と地元との直接の結びつきが強まる傾向がある。シーニックも新しい行政のメカニズムを切り開いてきた面があると思いますね。

### ルートコーディネーターという役割

**シーニックの取り組みが今日まで長く保たれてきた理由はいろいろあると思いますが、一つは「ルートコーディネーター」という各ルートを支える黒子役の存在があると思います。米国の制度にならった役割ながら、そのあり方は独自に模索して今日に至っています。この機会にご意見を。**

◆和泉 米国では運輸省のシーニックバイウェイ部局の職員などが担当していることが多い仕事ですが、日本で行政職員が担うのは短期間の異動などもあって現実的ではない。制度の検討期には地元に住んでいる人からルートコーディネーターを出そうと試行錯誤したこともありましたが、でも地域のなかの人間関係やdecさんとの連携の仕方の難しさもあって、decの職員がルートの支援することになりました。

◆倉内 手前味噌ですが、この役割を務めるdec職員たちは各地で高い評価をいただいています。専門的な知識を持ちながら地域に入り込んで、地域の人たちと一緒に考え、行動する立場ですが、行政、民間の両方のしくみや感覚を理解した上で細やかに調整して活動を支援していかなければならない。それぞれの職員が試練

を乗り越えながら蓄積してきたノウハウが成果につながっていると思います。職員たちはやりがいを感じているようですし、decとしても、そういう仕事を与えていただいていることに感謝しています。

◆山岸 地域の人たちにとってルートの取り組みは言わばライフワーク。それに向き合うルートコーディネーターには相当の覚悟が必要ですが、同じルートに長期間携わっている方も多くて、すごいなあと思っています。彼らが地域の信頼を得ているのは、その人自身には利益はなく、全くフラットな立場で地域のために尽力している存在だからです。

◆石田 見どころやおいしいものなど地域の魅力を知り抜いているルートコーディネーターは本当に素晴らしい。僕も助けられています。基本的な性格はそのままですが、今後さらに地域の経済を活性化させる推進力になってほしい。

ただ、彼らの働きぶりには懸念もある。現状では仕事とプライベートの境目があいまいで、取り組みに没頭して負担が過重になる危うさがあるのでは。その線引きを明確にするためにも育成システムを整え、制度化することが必要だと思っています。

### 新たな「共創」の姿を求めて

**他にも今後のシーニック進展のために必要なことは何か、ご提起いただければ。年数を重ねれば、担い手の高齢化や世代交代の問題も切実になりますね。**

◆和泉 ルート関係者が集う会議などでも若い世代をどう活動に引き入



れるかという新陳代謝の問題が議論されているようです。当面その動向を見守りながら支援センターとしてサポートできることがあればしていきたいですね。

◆倉内 嬉しいことにシーニックで活動してもらっていた学生が今春decに就職予定です。ルートコーディネーターについても新しい人材を入れていく必要があり、そのためにも新卒者獲得が大事で、「大学との接点拡大プロジェクト」として、共同研究や学生にアルバイトなどで職場に来てもらう取り組みも始めています。

◆石田 山岸さんは同年代に起業している人がたくさんおられると思うけれど、そういう若いスタートアップ企業関連の人たちがシーニックと連携する可能性はどうだろうか。

◆山岸 例えばNoMaps(ビジネスやクリエイティブを軸に2016年から札幌で開催されている都市型のフェスティバルイベント)を考えると、「道を使って面白いことをやろうよ」みたいな呼びかけはできるのかもしれませんが、道路が通常のルールや枠組みを超えて使いやすくなれば、興味を持つ人はいると思う。うまく先例をつくれれば、そこに新しいビジネスアイデアやコミュニティが生まれるのではないかと思います。

◆石田 こんなことをお聞きしたのは、僕は今、第9期北海道総合開発計画の開発分科会や国土審議会の地域生活圏専門委員会で委員長を務め、議論を進めているのだけれど、生産空間や地域生活圏は、地元を観

光やモビリティなどの事業によってきちんと稼げるしくみがないと将来的に成立できなくなると思うからなんですね。そこにはIT活用ももちろん重要な要素になってきます。

また一方で、最近「ゼブラ企業」と呼ばれる、利益を追求しながらも社会貢献の志をもって地域起こしや社会問題の解決に取り組もうという若い世代のスタートアップ企業が増えている。そういうところとの連携も含めて、地域が「稼ぐ」しくみを必要とするときに、シーニックはどう貢献できるのか。これが次の10年の大きな挑戦だと思っています。

◆和泉 シーニックの要綱には「誇りと愛着の持てる地域をつくる」とあります。その誇りは「自分のところはこれで稼いでいる」というような確信がないと湧いてこない。確かにシーニックは「稼ぐ」という面のつくり方がまだ甘い気がします。

### 地域の軸を見つける・増やす

**「楽しくなければシーニックじゃない」がシーニックに携わる側のスローガン。その思いを今後も長く継承していくには何が必要でしょうか。**

◆山岸 私がもし白老でシーニックに取り組むとしたら、まずは地域のいろいろな組織や団体の人たちを束ねるための「星」を見つけなければならぬと思っています。シーニックは良くも悪くもホワっとした、志向性ははっきりしないところがあって、それだけに誰でも参加しやすいけれど、最短距離で実現したいものがある場合にはなじまないところがある。だからこそルート独自で地域連携の軸になる「星」をうまく見つけ、共感を増やしていけるかどうか今後の大きなポイントになると思います。

◆和泉 地域には、これを実現したいという明確な方向性を持っている人が必ずしも多くはないですね。「みんなで考えましょう」と呼びかけて簡単に出てくるものでもない。そこは何かのきっかけで生まれてくるの

であり、スイスモビリティが道北のルートの広域連携の軸になったように、視察などを通じて外からの刺激を得る機会の提供が大切だと思っています。釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイウェイが永山在兼の偉業を縁に、その出身地である鹿兒島との交流を深めたように、歴史も地域の取り組みの大事な軸になりますね。

◆石田 僕は昨春のコロラドバイウエイズ訪問まで米国視察は4回ほど参加させてもらいましたが、貴重な知見をたくさん得ました。ルート関係者が国内外の取り組みを実地に見聞することは大きな刺激で、それが地元の見直しや新たな地域の軸の発見につながると思う。

一例に過ぎないが、コロラドバイウエイズで気づいたのは各ビュースポットなどに設置されているインフォメーション・ボード。その内容は地形から歴史、植物、動物までやたらと詳しく読み応えがあった。道内のルートではそれに相当するものは少ないですね。

◆倉内 そういところで、まさにほっかいどう学の知識が活用されればいいですね。私も旅先で「あの山は何ですか」と聞かれて困ることがある(笑)。ビューポイントパーキングやシーニックデッキには必ずそういう案内板があれば理想的です。

◆和泉 お客さんがわが家に来たときに、家のなかをきれいにして案内し、おいしいものを味わってもらおう、というような感覚がシーニックのおもてなしの1丁目1番地。当初から目指していたスタンスです。そんな感じで、訪れた人にわがルートの魅力をたっぷり伝えることができればいいですね。



現在の中央省庁の体制は2001 (H13)年1月6日に発足し、国土交通省もその日に誕生しています。横断的な組織として新設された総合政策局は、旧建設省・旧運輸省という2大勢力がしのぎを削る主戦場で、「省内融和」を掲げつつも、文化の違いや政策実現に向けたアプローチの違いから生まれる衝突はやはり必然的に発生します。相対的に小さな旧北海道開発庁出身の自分は、そんな総合政策局の某課に課長補佐職として属し、言い難い緊張感を感じながら生きにくい日々を送っていました。その新国土交通省において、各局・各課の政策を公式な場でぶつけあう最初の機会が、次年度予算要求に向けた「国土交通省重点施策」という政策集の編集です。この取りまとめも総合政策局が担当していたのですが、この時に北海道局から登録された耳慣れない施策が、他でもない「シーニックバイウェイ北海道(以下、SBW)」でした。本号の対談にも登場されている和泉さんが北海道局地政課の開発専門官という立場で主導したもので、この言葉を眺めながら、ともすれば埋没しかねない北海道局からこうした意欲的な独自施策が打ち出されたことを、とても嬉しく、また誇らしく感じたことを覚えています。

特殊な環境と空気感の中で出会ったSBWは、こうして自分の中で勝手に応援する存在となりました。そしてこの「勝手に応援」マインドこそが、後の「街道唱歌」制作の原点となります。

私事ですが、自分は浪人、留年、休学、修士進学と、凶らずも退学以外を軒並み経験しており、長いバブル期を全て学生という立場で送りながら、しがたないギタリストとして音楽や演劇等に携わっていました。当時の好景気はビジネスシーンにとどまることなく、音楽シーンでは演奏の仕事が数多くあり、演劇シーンも80年代半ばの小劇場ブームとも



シーニックバイウェイ北海道フォーラム2007の案内チラシ

相俟って活況で、自分達が旗揚げした劇団はJR琴似駅裏にあった石狩軟石造りの倉庫を拠点に活動を展開していました。

しかしJR琴似駅周辺も徐々に再開発の機運が高まり、タワーマンションや商業ビルの計画が具体化していく中で、拠点であった倉庫も解体という運命に。その際に繰り返した議論の末、同じ場所で劇場再建を目指すこととし、活動母体となるNPO法人を発足させました。劇場は語るも涙という紆余曲折を経て何とか2006(H18)年に再建に至っています。そして再建翌年の2007(H19)年6月にこの劇場を使って開催してくれたのが、シーニックバイウェイ北海道推進協議会主催の「フォーラム2007」というイベントでした。

上で劇場再建の経緯に触れたのには理由があり、偶然ながら同時期の立ち上がり、多くの方々が関わりながら輪が広がっていく過程、同居する途轍もない苦勞、そしてスタッフの前向きな熱意等々、当時の自分の中でSBWと劇場再建〜経営が重なって見えていたからに他なりません。フォーラムの事前打合せで懇親会における賑やかな演奏を依頼された際に、あの時の「勝手に応援」マインドが頭をもたげ、劇場を使って下さった事に対する感謝、そ

寄稿

# 「街道唱歌」のはじまり

## シーニックバイウェイ北海道

「街道唱歌」作詞・作曲 橋本幸氏  
(前国土交通省北海道局長)



SBWフォーラム2007の懇親会の様子(2007年6月2日)

して同志としての応援を兼ねた何かを形にしたいという想いで、ルート的情景を歌い繋ぐ曲の制作を、誰に頼まれたわけでもなく勝手に始めたのでした。

曲調はドライブソングとして使っていただけるよう、やや速めの4ビートのジャズに。

一方歌詞は、当時で既に6ルートもあったことから「♪汽笛一声新橋を〜」でお馴染みの名曲「鉄道唱歌」がヒントとなりました。あの曲が沿線の駅名を連ねて歌っているように、ルートに沿線の市町村や景観を歌い繋いで行くと楽しそうです。勿論、単にそれらを羅列しても歌詞にならないので、韻を踏んだり各番の構成を揃えたりしながら何とか完成し、懇親会の場で歌わせていただきました。有難いことに優しいルートの皆さん達が温かく受け入れて下さり、この歌の「非公式テーマソング」としての人生が始まりました。

想定外だったのはその後ルート数が急速に増加していったことで、勝手に作ったために勝手に締まっていた自分の首ですが、ルートの拡大に必死に追いつき、12番=札幌シーニックバイウェイ藻岩山

麓・定山溪ルートまでをCD化した2011年には、既に13分超という長尺ソングになっていました。

時はそこから更に10年を刻んで2022(R4)年。SBWが20年を迎えるのを前に、所謂「記念事業」として、更なる指定分の追加を含めた街道唱歌のリニューアルのお話をいただきました。自分が入省から退任までの約32年間もどうか演奏活動は続けており、幸いなことに今や道内随一のミュージシャン達が支えています。これほど良いタイミングもなく、彼らと札幌南区の芸森スタジオに入り、レコーディングを行いました。

通常このようなレコーディングでは、一旦録音を完了した後に、音の強弱、残響、音質といった様々なものを電子的に調整する「エフェクト」と呼ばれる工程を必ず行うのですが、フツーじゃないことに挑むのもSBW。メンバーの生の音の素晴らしさをそのまま聴いていただきたく、敢えてこれらを一切施さない「No Effect」で仕上げました。

他方、これを機会に(一社)シーニックバイウェイ支援センターの皆さんは、各ルートの歌詞とは別



「ゼロ番」制作のための打合せの様子(2024年7月24日)



芸森スタジオでの収録の様子(2023年1月8日)

に、包括的に全体を歌う通称「ゼロ番」の歌詞制作に着手してくれました。自分にとっても初めてとなる他者の手による作詞です。みんなで検討を重ねていただき、素晴らしい「ゼロ番」の歌詞が完成しました。

構成は、ゼロ番から始まり、間奏を挟みつつ計15ルートを歌い繋いで最後に再びゼロ番。作業の最終章として、件の劇場に支援センターや開発局担当者に集まっていただき、最後のゼロ番の手拍子と「北海道!」という声をお願いしました。

振り返れば2007年当時は、伴奏はベース、ギター、ピアノ...と一人で演奏しながらの多重録音作業で、歌もボーカリストと2人だけでこの劇場で録ったもの。

あれから約20年。素晴らしい演奏家達が一緒に音を作ってくれ、この劇場で多くの関係者の皆様のご協力で完成する不思議な巡りあわせに、深い感慨を禁じ得ません。

「街道唱歌」は(一社)シーニックバイウェイ支援センターのHPで公開中!  
<https://www.scenicbyway.jp/songs/>

